

# タッチタイプの世界

諏訪邦夫 Kunio.suwa@nifty.com

目次と該当項目との間にリンクをつけました。ご利用下さい。

この小稿はいつものとおり、クリエイティブコモンズですから、自由に処理して下さい。けっこうです。商品化の場合のみ、著者にお知らせください。

## 目次

はじめに.....	2
I タッチタイプは誰でもできる .....	3
II タッチタイプをマスターする手順：その1 .....	5
III タッチタイプをマスターする手順：その2.....	7
IV タッチタイプをマスターする手順：その3.....	17
V タッチタイプとローマ字 .....	22
VI タッチタイプでは「書く」「出力する」のが容易 .....	25
VII ピアノとタッチタイプとの関係.....	26
VIII 自分の経験二つ .....	28
おわりに.....	30

---

## タッチタイプの世界 : 本文

はじめに

本稿は、タッチタイプの楽しさと有用さをお知らせする目的の文章です。

読者の方々にお願いします。もし、ご自分がタッチタイプできない場合は、是非タッチタイプをマスターして下さい。本稿では、マスターする手順も説明します。

マスターできたら周囲の方々に、そのやり方を指導してあげて下さい。すでにタッチタイプのできていらっしゃる方も、本稿に眼をとおして下さい、タッチタイプの伝導者になって頂くようにお願いします。

タッチタイプとは

タッチタイプとは、パソコンを使う際にキーボードを目視せず、目は画面だけをみて、指は指の感覚で動かしてキーを打つやり方をいいます。つまり、キーボードの上で指が自由に動くようにトレーニングする意味です。

パソコンを使われる方々のうちで、タッチタイプをされる方の比率はどのくらいでしょうか。通常データでは10%から50%の間ということようで、率はグループによって異なるでしょう。でも、「全員がタッチタイプ」という集団はごくまれと判明しています。

タッチタイプを普及させたい、タッチタイプがどれほど有用かを知らせたい、しかもそれをマスターするのは手順を踏めば容易だということを知って頂くのが本稿の狙いです。

## I タッチタイプは誰でもできる

### タッチタイプは誰でもできる

タッチタイプは誰にもできます。両手 10 本の指を使える人は、必ずできます。あとで、ピアノとの関連などで説明しますが、人により巧拙はあるでしょう。マスターに要する時間や、最終的な到達レベルに差はあるのも仕方ありません。でも、極端に速い必要はありません。重要な点はキーを意識せず、指の動きで打つことで、「キーに書いてある文字を打つ」意識を捨てることです。

### タッチタイプ習得の時間

タッチタイプのトレーニング時間に要するのは 20-30 時間程度と判明しています。念のために、これを「英語学習」の時間と比較してみます。

英語を自在に読む、自在に話すのに要する時間は、1 日 2 時間真剣に学習して 10 年（ $\div 365 \times 20 = 7000$  時間）くらいで、大体 5 千時間から 1 万時間というのが教育者の一般的意見です。これと比較すると、タッチタイプに要する時間は百分の 1 にも足りません。

技術の保持が容易なのも素晴らしい点です。一般に、技術は折角マスターしても、続けなければ失われます。スポーツや楽器などがその例で、「昔はできたが」というものをお持ちではないでしょうか。私自身は、そういうものがいくつも思い当たります。高齢になってできなくなったのは仕方がないとして、その以前に単にトレーニング不足で失ったものとして、ドイツ語やウィンドサーフィンなどが思い当たります。

ところがタッチタイプの場合、こんな心配いりません。パソコンは必ず使い続けますから、一度マスターすれば、あとは自然にタッチタイプを続けるので技術を失うことはありません。タッチタイプは習得が容易だけでなく、維持も容易です。

### タッチタイプはとても具合がよい

タッチタイプは大変に具合がよいのですが、それは何故か、何故具合がよいのかの説明を試みます。

最大の理由は、キーを意識しないで打てる点です。タッチタイプは、キーを見ないで指の動きで打つことによって、打鍵を意識の外あるいは意識の下に追いやってしまいます。歩く際に足を どう動かすか意識しないように、食事の際に手指や箸を どう動かすか意識しないように、私たちが意識しないで行っている活動や行動がいろいろあります。だからこそ、歩きながら考えたり、食事しながらおしゃべりできます。歩く際の足の動きや食事の際の手指の動きをいちいち意識したら、歩きながら考えることも、食事の際の会話もできません。

キーも同じで、打鍵に注意を払ったら文章を作るのが妨害されます。だからこそ、タッチタイプをマスターして、文章作成に集中したいのです。

タッチタイプをマスターする途中では、キーに書いてある文字を頼りにしますが、タッチタイプをマスターしてしまえばキーに書いてある文字を打つのではなく、手が勝手に動いて文字を打ってくれるようになります。

### タッチタイプは疲れない

意識しない点と関係して、「タッチタイプは疲れない」ものです。一般に精神を集中させることは疲労を招き、長時間は続けられません。しかし、無意識で行う軽作業なら疲れません。ゆったりと1時間歩き続けるのは、どなたもできます。

タッチタイプで文章を書く場合、文章を書く頭脳活動のほうが制限要因で、手の動きは制限になりません。

タッチタイプで疲れない理由がもう一つあります。キーを見て打つ場合、視線はキーボードと画面を往復します。仮名漢字変換の確認に、画面を見ることは必須ですから。活動がうなじ（頸のうしろ）の痛みや肩凝りを招きます。タッチタイプが上手なら、頭痛や肩凝りが起こりにくくて済みます。

### 「タッチタイプ」不要という説もあるが

キーボードはタッチタイプでというのが本稿の基本の主張で、タッチタイプは疲れないことを練習を通じて体得してもらう方針です。

ここでは、それとは別の面からお話してみます。

タッチタイプできる人は、是非タッチタイプでと考えます。しばらくキーボードと付き合っただけで結局タッチタイプのできない人は、タッチタイプでなくていいやと考えます。「そんな練習より、もっと他にやることがある」というわけです。私はタッチタイプは何より重要と考えますが、その議論はやめます。

タッチタイプをマスターした人で、“タッチタイプは必要なかった”という人はいません。タッチタイプの人からみると、タッチタイプしない人がタッチタイプは不要と主張するのは、ゴルフをやったことがない人が、「あんなボールを棒でひっぱたいて何が面白い」というようなものです。ちなみに、私はゴルフをしません、70歳の少し前まで野球を一生懸命やり、ゴルフ好きの気持ちはわかるつもりです。あるいは、スキーをやったことがない人が、「あんな長い板を足にくくりつけて寒い思いして何が面白い」というようなもの、車を運転したことのない人が、「電車で移動すれば楽なのに、骨をおって金かけてムダ」というようなものです。

タッチタイプの人たちは、こんなことも考えています。タッチタイプの気分の良さも生産性の高さもそうでない人に比較して圧倒的ですから、他の人がタッチタイプでないほうが実は具合がよいのです。ゴルファーが増えなければゴルフ場は空いており、スキーヤーが増えなければスキー場は混まず、車を運転する人が少なければ交通渋滞もないわけで、要するに既得権者の有利さが守れるわけです。

キーボードを強調しない、タッチタイプタッチを強調しない背景には、そうした功利的な計算もあるかもしれません。私は十分に高齢なので、そんな損得より仲間を増やしたいと強く考えてこんな文章を書きますけれど。

## Ⅱ タッチタイプをマスターする手順：その1

いよいよ、タッチタイプに挑戦する段階にきました。

タッチタイプへの挑戦に何が必要でしょうか。私が考える要因は、タッチタイプをマスターしようという意欲と決断、そのために必要な30時間の投資、それを支える真面目な努力の三つです。

### 決断・時間・努力の三つ

第一に、タッチタイプをマスターしようと決断する必要があります。もちろん、大げさな決断でなくて何気なく開始して悠々と達成する場合もあることを否定はしません。でも一般には、「やるぞ」と気持ちを引き締めることが有用でしょう。

二番目は練習の時間で、最低でも10時間は必要で、一般には20~30時間の練習を要求されます。1日に20分として3日で1時間ですから、1月~2月ということでしょうか。経験的には、当初は辛いけれど途中から調子が出て、練習の時間も延びて修練の能率も向上します。

三つ目は真面目な努力です。簡単な練習問題を軽蔑せずに反復してください。タッチタイプは技術のマスターですから、反復練習は是非必要でそれを嫌わないでください。ありがたいことに、必要な努力はきびしいものではありません。英語のマスターや、楽器の練習に比較すれば実に軽いものです。

### ホームポジションに指をおく

まず、指のホームポジションを覚えて、そこに指をおきます。ホームポジションというのは、基本の指の置き方で、これをしっかり決めます。母指はスペースバーを打つだけで、打鍵には使いません。両手の4本の指、計8本を使います。母指はスペースバーを打ちません。

ホームポジションと指の分担は下の通りです。

右手は示指から小指に向かって j, k, l (エル), ; (セミコロン) の4つのキー

左手は示指から小指に向かって f, d, s, a の4つのキー

の上に置きます。各指は上段と下段のキーも担当します。

j と f の間に、縦に2列空いています。

j 側は上段から y, h, n でこれは右の示指が担当します。

f 側は上段から t, g, b でこれは左の示指が担当します。

つまり、他の指に比較して示指(人差し指)が担当するキーは数が多く、右は yhnulm 左が tgbfrfv と各々6つであり、他の指は各々3つです。

### まずアイウエオをマスター

日本語を打つには、アイウエオつまり aiueo のキーの使用頻度が極端に高いので、その位置を覚えてそのタッチタイプをマスターしましょう。ローマ字モードで

ア a : 左小指のホームポジションのキー

イ i : 右中指のホームポジションより1段上のキー

ウ u : 右示指のホームポジションより1段上のキー

エ e : 左中指のホームポジションより1段上のキー

オ o : 右薬指の ホームポジションより1段上のキー

つまり、アイウエオは、アがホームポジションで、他のイウエオはすべてホームポジションより1段上のキーであり、いずれも打ちやすいキーです。

まず aiueo つまりアイウエオをタッチタイプで打てるように練習します。完璧にマスターしましょう。

アイウエオ アイウエオ アイウエオ アイウエオ アイウエオ アイウエオ

最初の数回はキー一つ打つのに1秒かかるかも知れませんが、100回くらい練習して下さい。

10回ほど打つと、あとは楽になって速度が上がるでしょう。

1秒に1ストロークの速度で、これだけ打つ時間は30秒と少しです。

1秒に5ストローク打てるなら、所要時間は6秒です。

100回練習して、6秒×100つまり10分くらいです。

次に文字の順序をわざと変えて練習します。

オエウイア オエウイア オエウイア オエウイア オエウイア オエウイア

ウイエアオ ウイエアオ ウイエアオ ウイエアオ ウイエアオ ウイエアオ

エウオイア エウオイア エウオイア エウオイア エウオイア エウオイア

アウオイア アウオイア アウオイア アウオイア アウオイア アウオイア

左手小指は弱く特にトレーニングしたいので、アウオイアはアの頻度を増やしてあります。

この練習は文字5ストローク+1スペースバーですから6ストロークが一組です。リズムに乗って打って下さい。6拍子で打つのが便利かも知れませんが、6拍子の曲はゆったりしたものも多く、キーが少し速くなると不適切かもしれません、有名な曲では、ベートーヴェンの田園交響曲の第五楽章、シューベルトの未完成の両楽章、それにいろいろな舟歌が6拍子です。日本の歌もあるはずですが、私には昔歌った『揚げば尊し』くらいしか思い当たりません、

以上、6種類を各100回練習するのはつまり600回です。1秒に5ストロークの速度なら、計1時間です。つまり1時間の練習で、アイウエオのタッチタイプが完成します。実際はもう少しだけ長くかかるでしょうが、でも何倍もということはないでしょう。

アイウエオは大切なので、念入りに練習して下さい。これだけ練習しただけで、打鍵が楽になったと感じるはずですよ。

### Ⅲ タッチタイプをマスターする手順：その2

アイウエオが確実に、しかも楽に打てるようになったら、次は子音を組み合わせる50音を全部マスターします。一つずつマスターして行きます。マスターすべきキーは19で、そのうち5つはすでにマスターしたので、残りは14です。一寸ばかばかしく感じるかもしれませんが、その14を丁寧に練習します。

清音の子音：カ(k) サ(s) タ(t) ナ(n) ハ(h) マ(m) ヤ(y) ラ(r) ワ(w)

まずカ行に進みます。アイウエオがマスターできていれば、あとはkのキーを加えるだけで、これはホームポジションの右手中指ですから、打ちやすいキーです。

これを組み合わせ、カキクケコをマスターし、さらにコケクキカ、クキケカコ、ケクコキカ、カクコキカなどと練習します。また1時間ですが、キーが少し多く所要時間が少し延びるかも知れません。

同様にして

サ行(s)、タ行(t) . . . . .ワ行(w) と 清音のカナが全部マスターできます。

合計10時間からせいぜい20時間でしよう。

濁音と半濁音：ガ(g) ザ(z) ダ(d) バ(b) パ(p) は5時間くらいでしょうか。

カ行

カ行は、Kを組み合わせます。Kは右中指のホームポジションです。Kとアイウエオを組み合わせ、カキクケコが打てます。アイウエオが上手になっていれば、Kを一つ憶えるだけで、カキクケコが全部打てるのですから、なかなか能率がいいのです。もっとも、カキクケコの練習がアイウエオの練習にもなります。

前と同様に練習します。

カキクケコ カキクケコ カキクケコ カキクケコ カキクケコ カキクケコ

まずタッチタイプで打てるようになるまで、練習します。はじめはキーを見るでしょうが、練習を繰り返してキーを見ないで打って画面に希望の文字がでるようにします。

カキクケコが楽に打てるようになったら、下のよう順序を変えたものを作って練習します。

コケクキカ コケクキカ コケクキカ コケクキカ コケクキカ コケクキカ  
クキケカコ クキケカコ クキケカコ クキケカコ クキケカコ クキケカコ  
ケクコキカ ケクコキカ ケクコキカ ケクコキカ ケクコキカ ケクコキカ

左小指を使うカが打ちにくいなら、カが多いものを練習します。

カクコキカ カクコキカ カクコキカ カクコキカ カクコキカ カクコキカ

完璧に覚えてしまうまで練習して下さい。3回や5回では不足で、楽々と打てるまで50回も100回も練習をくりかえして下さい。

「KのキーがアルファベットのK」と意識する必要はありません。むしろ、「カキクケコの子音つまりカ行の子音を打つ」のです。そのキーの名前が、たまたまKなので、それと

アイウエオを組み合わせせてカキクケコを打ちます。

### サ行

サ行は、Sを組み合わせます。Sは左薬指のホームポジションで、やや打ちにくいかもしれませんが、Sとアイウエオを組み合わせると、サシスセソが打てます。アイウエオをすっかり上手になっていけば、サシスセソは少し打ちにくくても、頻度は高いのでよく練習しましょう。キーを一つ憶えるだけで、サシスセソが全部打てるのですから効率はいいのです。

サシスセソ サシスセソ サシスセソ サシスセソ サシスセソ サシスセソ

タッチタイプで打てるようになるまで、練習します。はじめはキーを見て打ち、次はキーを見ないで打ちます。キーを見ないで間違いなく打てるまで確実に練習します。楽に打てるようになったら、下のように順序を変えたものを作って練習します。

ソセスシサ ソセスシサ ソセスシサ ソセスシサ ソセスシサ ソセスシサ

スシセサソ スシセサソ スシセサソ スシセサソ スシセサソ スシセサソ

セスソシサ セスソシサ セスソシサ セスソシサ セスソシサ セスソシサ

左小指を使うサが打ちにくいと感じたら、サの多いものを練習します。

サスソシサ サスソシサ サスソシサ サスソシサ サスソシサ サスソシサ

楽に打てるようになるまで練習して下さい。

### ア行からサ行までの総合練習

ア行からサ行までの言葉を使って、総合練習します。

アカイキシ アカイキシ アカイキシ アカイキシ アカイキシ アカイキシ

サソウコケ サソウコケ サソウコケ サソウコケ サソウコケ サソウコケ

アサセキシ アサセキシ アサセキシ アサセキシ アサセキシ アサセキシ

ゆっくりでいいですから、頭が疲れないように、キーボードに目を落とさないで、考えながらタッチタイプでキーを打って下さい。自動的に打てますか？

### タ行

タ行は、Tを組み合わせます。Tは左人差し指の上右で、まあ打ちやすいキーです。Tとアイウエオを組み合わせると、タチツテトが打てます。タ行子音を一つ憶えるだけで、タチツテトが全部打てるので、前と同様に練習します。

タチツテト タチツテト タチツテト タチツテト タチツテト タチツテト

タッチタイプで確実に打てるまで、練習します。はじめはキーを見て打ち、次はキーを見ないで打ちます。キーを見ないで間違いなく打てるまで確実に練習します。

タチツテトが楽に打てるようになったら、順序を変えたものを練習します。

トテツチタ トテツチタ トテツチタ トテツチタ トテツチタ トテツチタ

ツチテタト ツチテタト ツチテタト ツチテタト ツチテタト ツチテタト

テツトチタ テツトチタ テツトチタ テツトチタ テツトチタ テツトチタ



左小指を使うタが打ちにくいと感じたら、タの多いものを練習します。

タツトチタ タツトチタ タツトチタ タツトチタ タツトチタ タツトチタ

楽に打てるまで練習して下さい。

## ナ行

ナ行は、Nを組み合わせます。Nは右人差し指のホームポジションの左下です。Nとアイウエオを組み合わせ、ナニヌネノが打てます。ナ行の子音を一つ憶えると、ナニヌネノが全部打てます。前と同様に練習します。ナニヌネノの練習がアイウエオの練習にもなります。

ナニヌネノ ナニヌネノ ナニヌネノ ナニヌネノ ナニヌネノ ナニヌネノ

タッチタイプで楽に打てるようになるまで、練習します。はじめはキーを見て打ち、次はキーを見ないで打ちます。キーを見ないで間違いなく打てるまで確実に練習します。

ナニヌネノが楽に打てるようになったら、下のよう順序を変えたものを作って練習します。

ノネヌニナ ノネヌニナ ノネヌニナ ノネヌニナ ノネヌニナ ノネヌニナ  
ヌニネナノ ヌニネナノ ヌニネナノ ヌニネナノ ヌニネナノ ヌニネナノ  
ネヌノニナ ネヌノニナ ネヌノニナ ネヌノニナ ネヌノニナ ネヌノニナ

左小指を使うナが打ちにくいと感じたら、ナの多いものを練習します。

ナヌノニナ ナヌノニナ ナヌノニナ ナヌノニナ ナヌノニナ ナヌノニナ

楽に打てるようになるまで練習して下さい。

## ハ行

ハ行は、Hを組み合わせます。Hは右人差し指のホームポジションの左側です。Hとアイウエオを組み合わせることによって、ハヒフヘホが打てます。アイウエオをしっかりと手になっていけば、Hを一つ憶えるだけで、ハヒフヘホが全部打てます。前と同様に練習します。ハヒフヘホの練習がアイウエオの練習にもなります。

ハヒフヘホ ハヒフヘホ ハヒフヘホ ハヒフヘホ ハヒフヘホ ハヒフヘホ

タッチタイプで楽に打てるまで、練習します。はじめはキーを見て打ち、次はキーを見ないで打ちます。キーを見ないで間違いなく打てるまで確実に練習します。

ハヒフヘホが楽に打てるようになったら、順序を変えたものを練習します。

ホヘフヒハ ホヘフヒハ ホヘフヒハ ホヘフヒハ ホヘフヒハ ホヘフヒハ  
フヒヘハホ フヒヘハホ フヒヘハホ フヒヘハホ フヒヘハホ フヒヘハホ  
ヘフホヒハ ヘフホヒハ ヘフホヒハ ヘフホヒハ ヘフホヒハ ヘフホヒハ

数回でなくて、何十回か練習して下さい。

左小指を使うハが打ちにくいと感じたら、ハの多いものを練習します。

ハフホヒハ ハフホヒハ ハフホヒハ ハフホヒハ ハフホヒハ ハフホヒハ

楽に打てるようになるまで練習して下さい。

### タ行からハ行までの総合練習

タ行からハ行までの言葉を使って総合練習をしておきます。

ナツノフネ ナツノフネ ナツノフネ ナツノフネ ナツノフネ ナツノフネ  
 ハハニテタ ハハニテタ ハハニテタ ハハニテタ ハハニテタ ハハニテタ  
 ハタトツチ ハタトツチ ハタトツチ ハタトツチ ハタトツチ ハタトツチ ハタトツチ

### マ行

マ行は、Mを組み合わせます。Mは右人差し指のホームポジションの右下です。Mとアイウエオを組み合わせることによって、マميمメモが打てます。マ行子音を一つ憶えるだけで、マميمメモが全部打てます。前と同様に練習します。マميمメモの練習がアイウエオの練習にもなります。

マميمメモ マميمメモ マميمメモ マميمメモ マميمメモ マميمメモ

タッチタイプで打てるまで、練習します。はじめはキーを見て打ち、次はキーを見ないで打ちます。キーを見ないで間違いなく確実に打てるまで練習します。

マميمメモが楽に打てるようになったら、下ののように順序を変えて練習します。

モممミマ モممミマ モممミマ モممミマ モممミマ モممミマ  
 ムミメマモ ムミメマモ ムミメマモ ムミメマモ ムミメマモ ムミメマモ  
 メムモミマ メムモミマ メムモミマ メムモミマ メムモミマ メムモミマ

左小指を使うマが打ちにくいと感じたら、マの多いものを練習します。

マムモミマ マムモミマ マムモミマ マムモミマ マムモミマ マムモミマ  
 楽に打てるようになるまで練習して下さい。。

### ヤ行

ヤ行は、Yを組み合わせます。Yは右人差し指のホームポジションの左上です。Yはホームポジションからやや遠く、指を延ばす必要があり、打ちにくいかも知れません。でも、マスターするとむずかしいキーを打つのも快感です。Yとアウオを組み合わせ、ヤユヨが打てます。アイウエオが打てれば、Yを一つ憶えて、ヤユヨが全部打てます。前と同様に練習します。

ヤユヨ ヤユヨ ヤユヨ ヤユヨ ヤユヨ ヤユヨ

タッチタイプで打てるようになるまで、練習します。はじめはキーを見て打ち、次はキーを見ないで打ちます。キーを見ないで間違いなく確実に打てるまで練習します。

ヤユヨが楽に打てるようになったら、下ののように順序を変えたものを作って練習します。

ヨユヤ ヨユヤ ヨユヤ ヨユヤ ヨユヤ ヨユヤ  
 ユヨヤ ユヨヤ ユヨヤ ユヨヤ ユヨヤ ユヨヤ

左小指を使うヤが打ちにくいと感じたら、ヤの多いものを練習します。

ヤユヨヤ ヤユヨヤ ヤユヨヤ ヤユヨヤ ヤユヨヤ ヤユヨヤ

楽に打てるようになるまで練習して下さい。

## ラ行

ラ行は、Rを組み合わせます。Rは左示指のホームポジションの左上です。Rとアイウエオを組み合わせることによって、ラリルレロが打てます。アイウエオをしっかりと上手になっていれば、Rを一つ憶えるだけで、ラリルレロが全部打てます。

前と同様に練習します。

ラリルレロ ラリルレロ ラリルレロ ラリルレロ ラリルレロ ラリルレロ

タッチタイプで打てるまで、練習します。はじめはキーを見て打ち、次はキーを見ないで打ちます。キーを見ないで間違いなく確実に打てるまで練習します。

ラリルレロが楽に打てたら、下ののように順序を変えて練習します。

ロレルリラ ロレルリラ ロレルリラ ロレルリラ ロレルリラ ロレルリラ  
 ルリレラロ ルリレラロ ルリレラロ ルリレラロ ルリレラロ ルリレラロ  
 レルロリラ レルロリラ レルロリラ レルロリラ レルロリラ レルロリラ

左小指を使うラが打ちにくいと感じたら、ラの多いものを練習します。

ラルロリラ ラルロリラ ラルロリラ ラルロリラ ラルロリラ ラルロリラ

楽に打てるまで練習して下さい。

## ワ行

ワ行は、Wを組み合わせます。Wは左薬指のホームポジションの一段上です。Wとアイウエオを組み合わせ、ワキウエヲが打てます。Wを一つ憶えると、ワキウエヲが全部打てます。ただし、ワキウエヲのうちで実際に使用することのあるのはワとヲだけで、キとエの使用頻度は極端に低いでしょう。“ヲ”は助詞の“を”として使用頻度の高い文字です。前と同様に練習します。

ワキウエヲ ワキウエヲ ワキウエヲ ワキウエヲ ワキウエヲ ワキウエヲ

タッチタイプで打てるようになるまで、練習します。はじめはキーを見て当然ですが、練習を繰り返してキーを見ないで打ちます。

3回や5回で止めず、楽にできるまで50回か100回位の練習が必要かも知れません。

ワキウエヲ が楽に打てたら、順序を変えて練習します。

ヲエウキワ ヲエウキワ ヲエウキワ ヲエウキワ ヲエウキワ ヲエウキワ  
 ウキエワヲ ウキエワヲ ウキエワヲ ウキエワヲ ウキエワヲ ウキエワヲ  
 エウヲキワ エウヲキワ エウヲキワ エウヲキワ エウヲキワ エウヲキワ

## ン

もう一つ、“ン”が必要です。これは次の文字と区別するために、NNと二つ打つことになっている場合が多いでしょう。たとえば、Nが一つでンになると次の母音との関係が区別がつきにくいからです。

NNA → ンア  
NA → ナ

という関係になります。ただし、別の文字を指定するワープロもあるようで、たとえばXをンに当ててるのもあります。でも、Xのキーは打ちにくい位置で、NNと2回打つほうが楽です。

#### マ行からンまでの総合練習

マラリヤワ マラリヤワ マラリヤワ マラリヤワ マラリヤワ マラリヤワ  
ユルムメモ ユルムメモ ユルムメモ ユルムメモ ユルムメモ ユルムメモ  
ワライユメ ワライユメ ワライユメ ワライユメ ワライユメ ワライユメ

#### ア行からンまでの総合練習

ロンヨリショウコ  
サルモキカラオチル  
スモモモ モモモ モモノウチ  
キモトタケウラ

ナモシラヌ トオキシマヨリ  
ヤマノアナタノソラトオク サイワイスムトヒトノイウ  
ヨウニアラシノ フカヌモノカワ

子音の勉強が9つできました。母音の5つと合せて計14で、あと5つです。頑張りましょう。

#### ローマ字でなくてローマ字式

ここで使う方法は、一見ローマ字入力のように見えますが、頭の中の回路は違います。ローマ字を打っているのではなくて、「仮名をローマ字式に打っている」のです。たとえば、カを打つのはKとAを打ってカではなくて、「Kの位置のキーとAの位置のキーを打ってカ」です。それが、ローマ字入力でなくてローマ字「式」入力と名付ける理由です。

ここでは仮名を打つことを真っ直ぐに狙う点が大きな利点です。その代り、アルファベットを打つ意識が乏しい分、アルファベットを打つ際に別の努力が必要かも知れません。今まで、「アルファベットを打つ」意識で練習していないので、英単語入力にとまどいがあり、改めて少し考えながら入力する必要がありそうです。

しかし、心配はいりません。文字を打って指が動くトレーニングは先にしているので、あとはわずかな頭脳のトレーニングでアルファベットも打てます。

## 濁音と半濁音

次は濁音と半濁音です。濁音と半濁音は、各々その記号“`”と“°”を打っても表示できますが、キーがホームポジションから遠い位置で打ちにくく、おまけに一文字中に濁音が入らないと変換ができない場合が多いでしょう。

たとえば、「ゆうびん」の「び」は「び」という字で、「ひ」に濁点を打った「ひ`」とちがいます。「ゆうびん」と入力すれば「郵便」と変換しますが、「ゆうひ`ん」では変換できません。登録されていないからです。濁音はK S T—という清音に濁点を打つのではなく、G Z D—という濁音用の子音を使います。この点は頭の切り換えが少し必要ですが、でもお蔭で打鍵数（キーを打つ回数）が少なく、おまけにアルファベットも覚えられます。

## ガ行

ガ行は、Gを組み合わせます。Gは左人差し指のホームポジションの右隣りで打ちやすい位置です。Gとアイウエオを組み合わせて、ガギグゲゴが打てます。Gを一つ憶えると、ガギグゲゴが全部打てるので、能率がいいのです。前と同様に練習します。

ガギグゲゴ ガギグゲゴ ガギグゲゴ ガギグゲゴ ガギグゲゴ ガギグゲゴ

まずタッチタイプで打てるようになるまで、練習します。はじめはギーを見るとして、練習を繰り返してキーを見ないで打てるようにします。

ガギグゲゴが楽に打てたら、下ののように順序を変えて練習します。

ゴゲグギガ ゴゲグギガ ゴゲグギガ ゴゲグギガ ゴゲグギガ ゴゲグギガ  
グギゲガゴ グギゲガゴ グギゲガゴ グギゲガゴ グギゲガゴ グギゲガゴ  
ゲグゴギガ ゲグゴギガ ゲグゴギガ ゲグゴギガ ゲグゴギガ ゲグゴギガ

もし左小指を使うガが打ちにくいと感じたら、ガの多いものを練習します。

ガグゴギガ ガグゴギガ ガグゴギガ ガグゴギガ ガグゴギガ ガグゴギガ  
やはり納得行くまで練習して下さい。

## ザ行

ザ行は、Zを組み合わせます。Zは左小指のホームポジションから1段下の位置にあります。Zは、大変に打ちにくいキーです。

小指がそもそも弱い上に、手が内側を向いていて、小指はホームポジションでさえもやや不自然な位置で打たざるをえないのに、そこから一段下げるのですから厄介です。そのままなら、小指を少し深く折り曲げ、さらに手関節を外側に回転して小指をZのキーの位置に移動します。

アンカーを使う:「アンカー」を説明します。Zを打つために小指を深く曲げる代わりに、中指(D)と薬指(S)を少し伸ばします。そうすると、小指は短いので自然にZの位置へ行きます。しかも、中指(D)と薬指(S)の位置は本来のホームポジションに留まっています。これを「アンカー」(錨)と呼びます。「別の指をホームポジションから外さずに、必要な指をずらすやり方」という意味です。

手や指の関節を曲げることに頼らず、むしろ手全体を下にずらせて、中指（D）と薬指（S）を伸ばしてアンカーとしてホームポジションに確保してZを打てば、手首にかかる負担が小さく打てます。手首のやわらかさにもよるでしょうが、上記の小指を少し深く折り曲げると手全体をずらすやり方とを組み合わせると打つのが普通でしょう。つまり、指も少し深く折り曲げ、手も少しずらします。Zの頻度は低くないので、練習して下さい。

Zに対応する右手は“/”で、出現頻度が低いので苦勞は少なく助かります。

Zとアイウエオを組み合わせることによって、ザジズゼゾが打てます。Zを打つのは厄介ですが、それを憶えるとザジズゼゾが全部打てます。前と同様にして練習します。

ザジズゼゾ ザジズゼゾ ザジズゼゾ ザジズゼゾ ザジズゼゾ ザジズゼゾ

タッチタイプで打てるようになるまで、練習します。はじめはキーを見て打ち、次はキーを見ないで打ちます。キーを見ないで確実に打てるまで練習します。

ザジズゼゾが楽に打てるようになったら、下のよう順序を変えたものを作って練習します。

ゾゼズジザ ソゼズジザ ソゼズジザ ソゼズジザ ソゼズジザ ソゼズジザ  
ズジゼザソ ズジゼザソ ズジゼザソ ズジゼザソ ズジゼザソ ズジゼザソ  
ゼズソジザ ゼズソジザ ゼズソジザ ゼズソジザ ゼズソジザ ゼズソジザ  
ザズソジザ ゴズソジザ ゴズソジザ ゴズソジザ ゴズソジザ ゴズソジザ  
納得行くまで練習して下さい。

#### ダ行

ダ行は、Dを組み合わせます。Dは左中指のホームポジションにあります。Dとアイウエオを組み合わせると、ダヂヅデドが打てます。前と同様にして練習します。

ダヂヅデド ダヂヅデド ダヂヅデド ダヂヅデド ダヂヅデド ダヂヅデド

タッチタイプで打てるようになるまで、練習します。はじめはキーを見て打ち、次はキーを見ないで打ちます。キーを見ないで確実に打てるまで練習します。

ダヂヅデドが楽に打てるようになったら、下のよう順序を変えて練習します。

ドデヅヂダ ドデヅヂダ ドデヅヂダ ドデヅヂダ ドデヅヂダ ドデヅヂダ  
ヅヂデダド ヅヂデダド ヅヂデダド ヅヂデダド ヅヂデダド ヅヂデダド  
デヅドヂダ デヅドヂダ デヅドヂダ デヅドヂダ デヅドヂダ デヅドヂダ  
ダヅドヂダ ダヅドヂダ ダヅドヂダ ダヅドヂダ ダヅドヂダ ダヅドヂダ  
納得行くまで練習して下さい。

#### バ行

バ行は、Bを組み合わせます。Bは左人差し指のホームポジションの右斜め下で、Yと同様にホームポジションから遠くて打ちにくいキーの一つです。でも、マスターすると指を伸ばしてむずかしいキーを打つのが快感で私は好きです。

Bとアイウエオを組み合わせ、バビブベボが打てます。Bを一つ憶えると、バビブベボが全部打てます。前と同様に練習します。

バビブベボ バビブベボ バビブベボ バビブベボ バビブベボ バビブベボ

これをまずタッチタイプで打てるようになるまで、練習します。はじめはキーを見て打ち、次はキーを見ないで打てるようにします。キーを見ないで確実に打てるまで練習します。

バビブベボが楽に打てるようになったら、下のように順序を変えて練習します。

ボベブビバ ボベブビバ ボベブビバ ボベブビバ ボベブビバ ボベブビバ  
 ブビベバボ ブビベバボ ブビベバボ ブビベバボ ブビベバボ ブビベバボ  
 ベブボビバ ベブボビバ ベブボビバ ベブボビバ ベブボビバ ベブボビバ  
 バブボビバ バブボビバ バブボビバ バブボビバ バブボビバ バブボビバ  
 納得行くまで練習して下さい。

マ行・ヤ行・ラ行は濁音がありません。

パ行（半濁音）

パ行は、Pを組み合わせます。Pは右小指のホームポジションの上の値です。小指ですから打ちやすくはありませんが、手関節を外側に回転するのはZのように内側に回転するよりずっと楽で、私はつらく感じません。人差し指をJにおいてアンカーに使う手法も組み合わせます。

Pとアイウエオを組み合わせ、パピプペボが打てます。Pを一つ憶えると、パピプペボが全部打てます。前と同様に練習します。

パピプペボ パピプペボ パピプペボ パピプペボ パピプペボ パピプペボ

これをまずタッチタイプで打てるようになるまで、練習します。はじめはキーを見て打ち、次はキーを見ないで打てるようにします。キーを見ないで確実に打てるまで練習します。

パピプペボが楽に打てるようになったら、下のように順序を変えて練習します。

ボペプピバ ボペプピバ ボペプピバ ボペプピバ ボペプピバ ボペプピバ  
 プピペパボ プピペパボ プピペパボ プピペパボ プピペパボ プピペパボ  
 ペプボピバ ペプボピバ ペプボピバ ペプボピバ ペプボピバ ペプボピバ  
 パプボピバ パプボピバ パプボピバ パプボピバ パプボピバ パプボピバ  
 やはり納得行くまで練習して下さい。

以上で、50音は一応全部終わりです。正確には、これだけでは文章は打てません。しかし、難物を征服しました。あとは最低限の特殊キーを練習すれば、文章が打てます。

特殊キー：文章を打つ際にカナ以外に必要なキーのことです。

特殊キーで一番大切なのは、句読点です。

読点 “、” あるいはコンマ “,” : 右手の中指のホームポジションから下の位置にあります。

句点 “。” あるいはピリオド “.” : 右手の薬指のホームポジションから下の位置にあります。

句読点に、“、。”を使うか、“, .”を使うかはワープロで指定できます。混ぜることも不可能ではありません。

読点は“私は、”という出現頻度の高いフレーズで練習しましょうか。

句点は“である。”という出現頻度の高いフレーズで練習しましょう。

その他にも必要は特殊キーがいくつかありますが、それは少しずつ憶えて解決しましょう。

さあ、これで基礎練習は一応できました。“残りのアルファベット”もありますが、飛ばします。

いろいろな単語や文章を打ってみて下さい。タッチタイプで打てますか？ 自由自在でなくてけっこうですが、キーボードに目を落とさないで打てることを確認します。



#### IV タッチタイプをマスターする手順：その3

小さいヤユヨは、単独では I（エル）キーを組み合わせせて、出せます。一応打ってみて下さい。

ヤユヨ ヤユヨ ヤユヨ ヤユヨ ヤユヨ ヤユヨ

さいわい、この使用頻度は低く、もっと楽な打ち方があります。単独では上記の方法が標準ですが、この文字は他の大きな文字と組み合わせせて入力します。それならその子音と Y と母音の組み合わせで書くことができます。そのほうが合理的で、それが普通の書き方です。

K Y とアウオを組み合わせると、キャキュキョとなります。練習して下さい。

キャキュキョ キャキュキョ キャキュキョ キャキュキョ キャキュキョ

S Y とアウオを組み合わせると、シャシュシヨとなります。練習して下さい。

シャシュシヨ シャシュシヨ シャシュシヨ シャシュシヨ シャシュシヨ

T Y とアウオを組み合わせると、チャチュチヨとなります。練習して下さい。

チャチュチヨ チャチュチヨ チャチュチヨ チャチュチヨ チャチュチヨ

同じ文字を、CH とアウオを組み合わせても出せます。練習して下さい。

N Y とアウオを組み合わせると、ニヤニュニヨとなります。練習して下さい。

ニヤニュニヨ ニヤニュニヨ ニヤニュニヨ ニヤニュニヨ ニヤニュニヨ

H Y とアウオを組み合わせると、ヒヤヒュヒヨとなります。練習して下さい。

ヒヤヒュヒヨ ヒヤヒュヒヨ ヒヤヒュヒヨ ヒヤヒュヒヨ ヒヤヒュヒヨ

M Y とアウオを組み合わせると、ミヤミュミヨとなります。練習して下さい。

ミヤミュミヨ ミヤミュミヨ ミヤミュミヨ ミヤミュミヨ ミヤミュミヨ

R Y とアウオを組み合わせると、リヤリュリヨとなります。練習して下さい。

リヤリュリヨ リヤリュリヨ リヤリュリヨ リヤリュリヨ リヤリュリヨ

G Y とアウオの組み合わせで、ギャギュギョも練習しておきましょう。

ギャギュギョ ギャギュギョ ギャギュギョ ギャギュギョ ギャギュギョ

Z Y とアウオの組み合わせで、ジャジュジヨも練習しましょう。

ジャジュジヨ ジャジュジヨ ジャジュジヨ ジャジュジヨ ジャジュジヨ

ところが、この行だけはキーをもっと減らせます。J（ジェイ）を使うのです。

Jとアウオの組み合わせで、ジャジュジョが打てます。これならたった2打です。

ジャジュジョ ジャジュジョ ジャジュジョ ジャジュジョ ジャジュジョ

Jは右手人差し指のホームポジションで、一番打ちやすい位置にあります。

D Yとアウオの組み合わせで、チャチュチョも練習しておきましょう。

チャチュチョ チャチュチョ チャチュチョ チャチュチョ チャチュチョ

B Yとアウオの組み合わせで、ビャビュビョも練習しておきましょう。

ビャビュビョ ビャビュビョ ビャビュビョ ビャビュビョ ビャビュビョ

P Yとアウオの組み合わせで、ピャピュピョも練習しておきましょう。

ピャピュピョ ピャピュピョ ピャピュピョ ピャピュピョ ピャピュピョ

以上で、小さいヤユヨの入力は終わりです。

#### 小さい仮名

他にも、小さい仮名を使うことがあります。“ウイスキー”のィとか、擬音の“ウォーッ”のオとッ、1カ月のカや、1ヶ月のケのような小さいカやケなどです。原則として、L(エル)との組み合わせで打てます。”LI”で”ィ”です。

詰る音(促音)のッは、”LTu”でも出せますが、次の子音を繰り返して綴るほうが容易です。ローマ字の規定がそうで、仮名漢字変換でも採用されています。例えば、ガッコウは「GAKKOU」、ハッシャは「HASSHA」です。

## 総合練習

総合練習として諺の例、詩歌の例、名作の冒頭部などを例に挙げます。

## 諺の例

イヌモアルケバボウニアタル  
 ロンヨリショウコ  
 ハナヨリダンゴ  
 ニカイカラメグスリ  
 ホネオリゾンノ クタビレモウケ  
 ヘタノナガダンギ  
 トシヨリノ ヒヤミズ  
 サルモキカラオチル  
 クンシアヤウキニチカヨラズ  
 スモモモ モモモ モモノウチ  
 コウヤノ シラバカマ  
 ヒャクブンハ イッケンニシカズ

## 詩歌の例

ナモシラヌ トオキシマヨリ  
 コモロナル コジョウノホトリ  
 ヤマノアナタノソラトオク サイワイスムトヒトノイウ  
 アメニモマケズ カゼニモマケズ  
 ワレナキヌレテ カニトタワムル  
 ヨワニアラシノ フカヌモノカワ  
 ココロニタイヨウヲモテ クチビルニウタヲモテ

## 名作の冒頭や一節

アル クモッタ フユノヒグレデアル。ワタシハ ヨコスカハツ ノボリ ニトウキヤクシャ  
 ノスミニ コシヲオロシテ、ボンヤリハッシャノフエヲマッテテイタ。(蜜柑：芥川龍之介)

メロスハ ゲキドシタ。カナラズ、カノジャチボウギャクノオウヲ ノゾカナケレバナラヌ  
 トケツイシタ。(走レメロス：太宰治)

フジニハ ツキミソウガ ヨクニアイウ (富嶽百景：太宰治)

テンハヒトノウエニヒトヲヅクリラズ ヒトノシタニヒトヲヅクリラズト イエリ。(学問ノ  
 スゝメ：福沢諭吉)

マワレバ ダイモンノミカエリヤナギ イトナガケレド、オハグロミゾニ トウカ ウツル サ

ンガイノサワギモテニトルゴトク・・・・・・・・・・(たけくらべ：樋口一葉)

カゼタチヌ、イザイキメヤモ。(風立ちぬ：堀辰雄)

ノチノツキトイウジブンガクルト、ドウモオモワズニハイラレナイ。(野菊ノ墓：伊藤左千夫)

サンボウホンブヘンサンノチヅヲ マタクリヒライテミルデモナカラウ、トオモツタケレドモ、アマリノミチジャカラ、テヲフレルサヘアツクルシイ・・・・・・・・・・(高野聖：泉鏡花)

スガオニクチベニデウツクシイカラ、ソノイロニマガウケレドモ、カワイイネハ、クチビルガナルノデハナイ。オツタハ、シラハニ ホオズキヲ フクミンデイル。……(婦系図：泉鏡花)

コッキョウノ ナガイトンネルヲヌケルト ユキグニデアッタ。ヨルノソコガ シロクナッタ。(雪国：川端康成)

ミチガツツラオリリニナッテ、イヨイヨアマギトウゲニ チカヅイタトオモウコロ、アマアシガスギノミツリンヲシロクソメナガラ、スサマジイハヤサデ フモトカラ ワタシヲ オツテキタ。(伊豆ノ踊子：川端康成)

タカセブネハ キョウトノタカセガワヲ ジョウゲスル コブネデアル。トクガワジダイニ キョウトノザニンガ エントウヲモウシワタリサレルト、ホンニンノシンルイガ ロウヤシキヘヨビダサレテ、ソコデ・・・・・・・・・・(高瀬舟：森 鷗外)

セキタンヲバ ハヤツミハテツ。チュウトウシツノツクエノホトリハ イトシズカニテ・・・・・・・・・・(舞姫：森 鷗外)

チュウヘイサンハ エラクナリナサルダロウ トイウヒョウバントドウジニ、チュウヘイサンハ ブオトコダ トイウカゲゴトガ、イチゴウニツタエラレテイル(安井夫人：森鷗外)

エチゴノ カスガヲヘテ イマヅヘデルミチヲ、メズラシイタビビトノ ヒトムレガアルイテイル。(山椒大夫：森鷗外)

シャクニサワルツタラ、アリヤシナイ、ト、ウバノオハマガ、ダイドコロノアガリガマチニ コシヲカケナガライウ。(次郎物語：下村湖人)

ワガハイハネコデアル。ナマエハマダムイ。ドコデナマレタカ トントケントウガツカヌ。

ナンデモウスグライジメジメシタトコロデ ニャーニャーナイテイタコトダケハ キオクシ  
テイル。(吾輩は猫である：夏目漱石)

オヤユズリノムテッポウデ コドモノトキカラ ソンバカリシテイル。(坊っちゃん：夏目漱  
石)

ヤマミチヲノボリナガラ、コウカンガエタ。チニハタラケバ カドガタツ。ジョウニサオ  
サセバ ナガサレル。イジヲヨオセバ キュウクツダ。トカクニ ヒトノヨハスミニクイ。(草  
枕：夏目漱石)

ワタクシハソノヒトヲ ツネニセンセイトヨンデイタ。ダカラココデモ タダセンセイトカ  
クダケデ ホンミョウハウチアケナイ。(こころ：夏目漱石)

キソヂハ スベテヤマノナカデアル。アルトコロハ ソバヅタイニユクガケノミチデアリ、  
アルトコロハ スウジュッケンノフカサニノゾム キソガワノキシデアリ、アルトコロハ  
ヤマノオヲメグル タニノイリグチデアル。ヒトスジノカイドウハ コノフカイシンリンチ  
タイヲ ツラヌイテイタ。(夜明ヶ前：島崎藤村)

オイ ジゴクサ エグンダデ！ フタリハ デッキノテスリニヨリカカッテ、カタツムリガ  
セノビヲシタヨウニノビテ、ウミヲカカエコンデイル ハコダテノマチヲミテイタ。(蟹工  
船：小林多喜二)

## V タッチタイプとローマ字

この項目では、タッチタイプはローマ字の意識が消えることと、それと関連してローマ字中枢という考え方を紹介します。

タッチタイプはローマ字の意識が消える

タッチタイプを練習する際、パソコンは当然ローマ字モードになっています。しかし、「ローマ字を使っている」という意識は、比較的早期に消えていると推測します。

理由はこうです。「あ」と入力する際、アルファベットの“a”を入力してそれをローマ字に変換して「あ」にしているという意識はありません。意識する理由もありません。タッチタイプでは、直接「あ」を入力しています。使っているのは“a”のキーですが、それがローマ字だという意識は消えます。

同じことが50音のすべてに成立し、ローマ字を介してカナを入力する意識はありません。この点は、キーボードを見て打つ場合と大きく異なります。キーボードを見て打つ場合、打つキーにはアルファベットが刻印してあり、カナとローマ字の変換を常時意識しますが、タッチタイプではキーをみないのでアルファベットを意識しません。

「ローマ字を使う」のではない

私はタッチタイプと、キーを見て打つのは決定的に違うと述べますが、理由は何故でしょうか。

理由は、タッチタイプでは「キーに書いてある文字を打つのではない」ので、「ローマ字を使う意識がない」故です。

アイウエオと打つ時に、“a”、“i”、“u”、“e”、“o”というキーを打ちます。でもタッチタイプの場合、アを打つのは、“a”というキーを打つのではなくて、「左手の小指でホームポジションのキーを打つ」のです。アイウエオをローマ字で書くと“a”だからこのキーを打つのではなくて、キーの機能はアですが、たまたまキーの名前が“a”なだけです。つまり、タッチタイプでは早い段階で、“a”のキーを打つという意識、ローマ字を使うという意識が消えます。

一方、キーボードを見て打つ場合、「“a”のキーを打ってアと書く意識」がいつまでも消えません。ですからローマ字を使っている意識が残ります。

同じことが、ア行全部に言えます。

ですから、指をホームポジションに置くことをまずマスターして下さい。

それから、アイウエオのタッチタイプを練習して下さい。

アは、“a”というキーを打つのではなく、「左手の小指でホームポジションのキーを打つ」のです。

それがたまたま“a”というキーです。

イは、“i”というキーを打つのではなく、「右手の中指でホームポジションの一段上のキー

を打つ」ので、それがたまたま“i”というキーです。

ウは、“u”というキーを打つのではなく、「右手の食指でホームポジションの一段上のキーを打つ」ので、それがたまたま“u”というキーです。

エは、“e”というキーを打つではなく、「左手の中指でホームポジションの一段上のキーを打つ」ので、それがたまたま“e”というキーです。

オをは、“o”というキーを打つではなく、「右手の薬指でホームポジションの一段上のキーを打つ」ので、それがたまたま“o”というキーです。

これでアイウエオのタッチタイプが完成しました。

キーに書いてある文字が消えても打てます。

どうせ見ないで打つので、消す必要もありませんが。

キーに別の文字を書き加える方法:子どもやアルファベット嫌いの方に

この考え方を発展させ、こんなアイデアも生まれます。

“a”、“i”、“u”、“e”、“o”のキーにアイウエオと書きこむと打ちやすくなります。特に、アルファベットの苦手な子供や、英語アレルギーの大人有用でしょう。

この点は、私が「キーボード革命」で提案したことで、一応特許も申請しました。ただし、特許は申請しただけで取得はしていません。

#### 「ローマ字中枢」の仮説

タッチタイプに関連して、「ローマ字中枢」という仮説を述べます。あくまでも勝手な仮説で、証拠はありません。

ローマ字を「しっかり使う」場合、脳に「ローマ字中枢」ができてそれを活動させるのではないかという理屈です。

たとえば、英語を自在に読み書き話す人の脳の中には「英語中枢」ができ、その場合「日本語と英語を翻訳でやりとりしている」という感覚ではありません。「二つの言語中枢が勝手に動いている」感じですが、別個に働いている印象です。ときどき知らない単語にぶつかったり、英語の表現が思い当たらない時に初めて、両者をつないで「翻訳」の作業を行います。

証拠としてこんな事実を挙げましょう。その人たちが英語を話すことは、何時間でも持続できます。英語環境で住む際には、常にそれをしているのですから。

ところが、「同時通訳」は違います。こちらは特殊なトレーニングが必要で、それでも通常は15分を限度とするそうです。私自身が行った際は5分でも大変で、「もう十分」という気持ちでした。同時通訳は二つの言語を密接につないで活動させるので、一方の言語を勝手に使うのとは根本的に違います。

同じことが、ローマ字を使うことにも言えそうです。つまり、ローマ字を読んだり書いたりする時はそういう言語中枢つまり「ローマ字中枢」ができて、それを活動させます。ところがキーボードを打ってどんどん日本語を書く場合、「ローマ字を使っている」という意識はありません。指が勝手に動きます。

私自身は、英文タイプから入ってキーボードを使うようになったので、当初は「ローマ字で打っている」意識があり、「ローマ字中枢」を残していた気がします。そうして、その出来ていた「ローマ字中枢」を今は失ったのではないのでしょうか。現在はローマ字をまったく意識しません。

私のステップは、英字キーボード（タイプライターと古いコンピュータのキーボード）は1961年から使いはじめ、パソコンでローマ字を打つようになったのは1983年頃で、その間20年以上英文字を打っていました。ですから、皆様方が日本語キーをマスターするのとはステップが違います。

現在、直接パソコンのタッチタイプで始めた方や始める方は、早い段階で「ローマ字で打っている」意識が消えて、「キーボードでカナを打って日本語を書く」意識になるでしょう。つまり、キーを見ないで打つ人は、頭の中でローマ字を意識することが少なく、「ローマ字中枢」とは縁がないままキーボードのなじむと推測します。

他方、キーを見ながら打てば、どうしてもキーの名前とローマ字を意識させられます。つまりキーを見ながら打つとローマ字を使う意識が残りやすく、この点がタッチタイプと見て打つのと大きな差になりそうです。

いろいろな考え方があって、私は自分の理屈が正しいと強く主張する気はありませんが、でも的を大きく外してはいないだろうと感じます。

ともあれ、タッチタイプとキー見て打つのがこんな点で決定的に違うと考えます。



## VI タッチタイプでは「書く」「出力する」のが容易

タッチタイプでは、「書く」「出力する」のが容易になります。当たり前なことのようにですが、あまり指摘されない事柄を含めて、ここに記述します。

タッチタイプで書く利点：キーを意識下に

タッチタイプでは、前に述べた「キーを意識下に追いやる」のが大きな利点です。打鍵を意識せず、現在の仕事つまり多くの場合は文章を作成することに専念できる点です。

仮名漢字変換のルーチン化

画面を見ながら打ち続けられるから、仮名漢字変換を確認するのが当たり前になります。仮名漢字変換辞書は、頻用するものが上位に出るように工夫されており、当然これも自動的に使えます。一字一字眼を凝らし神経を張りつめる必要はありません。

頸と肩の負担が少ない

画面とキーボードの間に目を往復させることがないので、うなじ（項：頸の後側）や肩への負担がなく、頭痛や肩こりから解放されやすくなります、

常に新しい景色

タッチタイプの重要な要素として、「常に新しい景色をみる楽しさ」を指摘します。キーボードを眺めながらの打鍵では、時間の半分はいつも同じ景色をみえています。一方タッチタイプでは、新しい文章が画面に現れるのを確認しながら進むので、同じものを見ていることがありません。

キーボードを確認しながらの打鍵は通勤電車の景色であり、タッチタイプでは毎日が新しい土地への旅のようなものというのは少し大袈裟でしょうか。でも、それがタッチタイプの楽しさの大きな要素だと考えます。

そんな風ないくつかの要素が、タッチタイプの楽しさを支えてくれます。

## VII ピアノとタッチタイプとの関係

ピアノとタッチタイプとの関係に触れます。

ピアノを弾いた人はタッチタイプが上達しやすい

ピアノを弾いた人は、タッチタイプが上達しやすいと判明しています。この点は、確立した事実です。

その解釈ですが、ピアノを弾くとは、手指を動かして活動し、それで意を伝えることですから、ピアノとキーボード操作との関連が深いのは当然です。

子ども時代からピアノを習う人は、10年以上の練習を行うので、その間に指の修練ができます。それだけでなく、指とキーをつなげる頭の回路も成熟します。

普通の人々のタッチタイプとピアニストのタッチタイプ：速度に大差

ふつうの人たちがタッチタイプが完成した場合の速度は、200-300 キー/分です。

ところが、本格的にピアノの修練を積んだピアニストのタッチタイプは1000/分以上だそうです。3倍から5倍もの差があります。

でも、落胆には及びません。私たちが文章を書く場合、200-300 キー/分で十分で、それ以上速く打てても、文章を作る頭脳の働きが追い付きません。1000/分の速度は、文章を写す場合に使うだけでしょう。

初見の差：タッチタイプは常に初見可能

ピアノとタッチタイプとに根本的に違う点もあります。

ピアノを10年習っても、むずかしい曲を初見では弾けません。ピアノには和音の問題があり、同時に打つキーの組み合わせが多く、しかも曲毎に指使いが異なるので、それをマスターするのが大変です。

ところが、タッチタイプは1度マスターすれば何でも初見で打てます。何故なら、タッチタイプの指使いは1種類に決まっており、一度マスターして打ち続ければ技術が容易に保持できます。

ピアニストがタイピストとしても優秀な理由

ピアニストはコンピュータのキー入力者として優秀だという話を、少し前に聞きました。それがわかったので、音楽学校の出身者をコンピュータを操作する人として、企業が積極的に雇ったということです。その解釈ですが、単純に指がよく動いて正確だというだけでなく、自分の心を指の動きとキーボードで表現するという点が、ピアノとキーボードで共通しているからではないでしょうか。私自身は、ピアノのレベルが低くて実感はありませんが、友人の一人はアマチュアとして大変なピアニストで、タイプの技術もコンクールに出られるレベルで、おまけにローマ字とオアシスのバイリンガルです。他にも、ピアノが上手でキーも見事に打つ人を数人知っています。

とにかく、キーボードで書くということは、単純にキーの位置を憶える、そのキーに向

かって指がよく動く、ということに止まらないのはたしかで、タッチタイプを続けてさらに修練が進む可能性でもあります。

私たちができる能力で考えればわかりやすいでしょう。私たちは、文章を音読できます。文字を眼でみて、それを一字一字音に出すように脳に反応させていたのでは、いくら神経伝導が速くても、脳の働きがよくても、間に合いません。実は、眼が見取った文字や文章を一時脳に貯め込み、一方ですでに貯めてある文章を言葉に出すように処理するということを脳は同時に行っています。実際、私たちが音読する場合、声に出している箇所よりも少し先を読んでいます。

その上、文章でも音楽でも「予測」の要素が加わります。見る際に、個々の文字を読み取るだけでなく、単語のかたまりとしてみて、頭の中でそのまま処理します。単語も文章も音楽もルールにそって作られており、知っている人は「予測」できます。だから眼で読みながら朗読し、楽譜を見ながらそのまま楽器で弾いたりすることが可能なわけです。人によっては、聴きながらそのまま弾くことさえできます。歌唱を聴きながら私たちも歌うことができるのも、低レベルながらそれを行うわけです。

## VIII 自分の経験二つ

タッチタイプに私が何故こだわるかに関連して、自分の経験を二つほど述べます。

若い時：英文を20年使ってから日本語に

私がキーボードに最初に触れたのは、英文タイプライターです。1961年に研修医（当時のインターン）を虎の門病院で行ないました。その際に、泌尿器科部長齋藤先生が“タイプライターを使わして上げるから、練習したまえ”といて下さいました。当時はタイプライターは外国製しかなく、1台5万円以上もする高価なものでした。インターンの当直収入（医師免許はないので、法律的には違反です）が一晩500円程度だった時代です。約1ヵ月間、夕方になると泌尿器科の外来に通って一生懸命に練習して、かなり上手にうてるようになりました。その前の医学部の4年間、ピアノを少し習ったのもきっかけになったと感じました。ピアノ自体は結局ものにならず、今はまったく弾けません。

1963年にボストンに留学して、その病院でレジデント（研修医）をしました。その際、タイプライターは最初に購入したもので、日本では高くて買えなかったSmith-Coronaです。3年間愛用し、恋文をかいたこともあります。

1966年に帰国すると間もなく、ジョンス＝ホプキンスに留学していた同級生の開原成允先生が帰国し、コンピュータの勉強をしてきたことを知りました。丁度その頃、大学紛争が激化して研究室が封鎖され、実験ができなくなったのを機会に、ボストン時代に考えていた問題に挑戦しようと、開原先生の手ほどきでコンピュータに取りつきました。ですから、コンピュータへの関わりは、大学紛争に起因しています。この開原先生は、2011年初頭に仕事の最中に急死しました。

その後、1969年末にカリフォルニア大学サンディエゴ校（UCSD）に赴任し、さらに1972年末に帰国し、ミニコンを使うようになりました。コンピュータ使用はすべてプログラミングです。

1978年ころ東芝がワープロを発表し、タイプには自信があったので、早速欲しくて“東芝メディカル”（東大のすぐ近くにありますが）に連絡して、一寸使わせて貰いました。無料で借りようと交渉しましたが失敗しました。500万円位して、大きさも机1台分です。同じころパソコンを使い始めましたが、初期のものは日本語は扱えません。

1984年初頭、ニューヨークのコロンビア大学で1ヵ月間客員教授をして、受け取ったお金で、帰国してから自宅にPC9801F2を購入しました。直前に教室にも購入してあり、私の周囲にF2がそろい、パソコンで文章を書けるようになりました。ワープロの本格的な使用開始です。

つまり、英文タイプと英文のキーボードを20年以上使用した後に、ようやく日本語を書くようになりました。したがって、「ローマ字で日本語入力」という意識が私にはしばらく残ったと感じます。

2011年山で滑落：左手小指骨折で左手が使えない状況

もう一つの経験はつい最近です。2011年11月に山で滑落しました。障害自体は、背骨の

骨折（圧迫骨折）のほうが重大でしたが、同時に左手小指を骨折して左手が使えない状況が数週間続きました。

片手打鍵は文字の入力にも不便でしたが、意外な不便がコピー/ペーストなどの編集作業でした。私のやり方は左手小指でコントロールキーを押しながら、B・K・Cなどを打つのですが、これは反射的作業なので、右手ではできません。そもそもどのキーを打つのか記憶していません。仕方がないので、マウスとキーの併用で領域を決めて・・・・・・といううっとうしい作業に往生しました。

キーを反射的に打つことの有難味を痛感したと同時に、反射的な活動は片手になるとできないと認識した興味深い経験でした。

## おわりに

「はじめに」で述べたことを繰り返します。

読者の方々に是非お願いします。もし、ご自分がタッチタイプできない場合は、是非タッチタイプをマスターして下さい。本稿では、マスターする手順も説明してあります。

すでにタッチタイプのできていらっしゃる方も、本稿に眼をとおしてタッチタイプの伝導者になって頂くようにお願いします。

### タッチタイプの技術は長寿

私の場合、24歳でタッチタイプをマスターし、それから74歳の今日まで使い続けています。おかげで多数の本を書いて読者を得、さらに教職も続けています。50年間変わらず有用な技術は、ほかにあまり思い当たりません。車の運転は続ける人が多いでしょうが、私はしばらく前に止めています。

読者の方々も、この有用で持続性の高い技術を是非マスターされて使われるよう、お願い申し上げます。

タッチタイプを普及させたい、タッチタイプがどれほど有用かを知らせたい、しかもそれをマスターするのは手順を踏めば容易だということを知って頂くのが本稿の狙いです。

ちなみに、この文章を書くきっかけは、私の学生の一人が大変見事にタッチタイプしているのをみて、「他の学生にもマスターさせたい」と思いつき、「自分の同僚の教師が全員私より若いのにタッチタイプができない」ことに気づいて、「彼らにまずマスターして貰おう」と考えて書き始めました。